

〈英語教育21世紀叢書〉
「英語で授業」ここがポイント

齋藤栄二 著

四六判 196pp.
本体1,700円＋税

高橋昌由



“齋藤授業実践学”の入門書

本書は「英語で授業」の指南書である。本書が伝えようとする「英語で授業はここがポイント！」を実践すれば、英語授業に自信がない教師も、優れた実践が可能となるのは魅力的である。また、「戦略を持った闘い」である授業に教師がどのように臨めば、生徒が英語を使って主体的に参加する授業が作れるのかが説かれている点も魅力的である。

これらの英語授業実践論に加えてのさらなる魅力は、読者のみなさんも知るところとなろうが英語教師の使命とは何かなどの英語教師論や、英語教育は如何にあるべきかの英語教育論が説かれている点にある。

よって、本書は、「英語で授業」の指南書というだけでなく、教育全般にも通じる「齋藤授業実践学」の入門書であることも確認しておく必要がある。この実践学は、小学校から大学院博士課程までの教歴を持ち、教育を熟知した著者が、様々な教授法の良いところを折衷主義で採り入れて進化発展させてきたもので、日本の英語教育現場で有用だという安心感がある。

本書では、齋藤授業実践学の本質がいわば錦の御旗として説かれている。この錦の御旗は、英語授業実践論を授業の鉄則に従って易から難に説き進めていく縦糸と、英語教師論や英語教育論を「教育は永遠です」の気概で説く横糸で織られている。またこの御旗が異彩を放つのは「装飾」による：図解やイラスト等、「☆ここがポイント」、筆者と若い教師の対話、等。

図解やイラスト等は簡明で、著者の授業に参加している気分が十分堪能できる。また、「☆ここがポイント」では、それまで述べてきた内容が短く明確にまとめられているので再確認に便利である。さらには、著

者と若い教師の対話では、「ところでどこまで話しましたっけ。」などユーモアのある記述なども含み楽しく読め、「なるほど！」と読者に安心感と示唆を与えてくれる。ちなみにこの若い教師は、大学教師としての著者の教え子で、著者に仲人をしていただいた現役の男性中学校教師という設定である。

本書は2部構成である。第I部での縦糸は3種類の英問英答（Fact Finding型、Inferential型、P.I.型）を活用しての易から難への英語授業の進め方で、横糸は訳読方式の授業の弊害や「結果が出てなんぼ」などのeye-openingな指摘で織り成されている。また『あなたは一生文型指導屋で終わるつもりなのですか』の引用を基に「私たちは英語教育の教師です。英語だけを教えるのなら、わざわざ『英語教育』と言わなくても良いのではないのでしょうか。」と締められる。

第II部では、「英語で授業」の土台としての新出単語、指名、質問ができる生徒育成、音読が扱われて、それぞれの指導の縦糸と、著者の経験から得た指導の在り方（例えば、生徒の知的緊張感の高揚、「学習は個人において成立する」）の横糸で織り成されている。著者の経験には、授業や教科書執筆の経験等も含まれ、その経験の根底には「授業の成功は細部に宿る」がある。第II部の最後には「この本のまとめ」として、毎日の小さな工夫と積み上げに力を尽くして生き甲斐のある人生にしてほしい、と著者から読者へのエールが送られている。

本書の目的のひとつは、誰にでもできる「英語で授業」の方法の提案により、教師を元気づけることであろう。これには、コミュニケーションに参加できない大量の人間を育てたこれまでの英語教育の反省に基づくと言う著者の思いに読者は対峙する必要がある。

生徒の「英語的スタミナ」を育てるためには旧弊を脱却する必要がある、「自分が変わらないで、生徒が変わるはずはありません」や「教師はたえず生徒から学べ」の著者の透徹した思いに読者は助けられるであろう。また、「皆さん、一緒にがんばりましょう」や次世代にしっかりバトンタッチしていきたいという著者の言葉にも励まされ、読者は「考えに考え抜く」ことを忘れず日々精進しようと決意を新たにすることだろう。（たかはし まさゆき・大阪府立園芸高等学校首席）

英語 4 技能評価の理論と実践

望月明彦・深澤 真・印南 洋・
小泉利恵 編著

A 5 判 320pp.
本体2,400円＋税

矢野 賢



これからの英語評価を考えるための最新ガイド

本書は、主に中・高の外国語科における4技能評価や技能統合評価に関して、理論と実践の双方から現場の教員にもわかりやすく説明した書である。

前半の理論編では、学習到達目標設定に関する理論的背景と技能ごとの評価や技能統合評価を実施する際に参考になる基礎知識がわかりやすく書かれている。

理論編1では「CAN-DO リストと観点別評価」について、それぞれの定義や目的、相互の関連などについて述べられている。リスト作成について、CEFR-J など既存のリストをもとに作成するトップダウン方式と、各学校の生徒に合わせたリストを記述するボトムアップ方式の違いや、作成上の留意点などが説明されている。評価法については、形成的と総括的双方の評価の必要性について述べている。また、観点別評価を数値化し総括的评价に繋げる例などもあり興味深い。

理論編2「ライティングの評価」では、実際に作文を書かせる直接テストと語句並べ替え等による間接テストを区別して扱っている。学習指導要領が求める前者については、その分析方法や備えるべき点などについて書かれている。評価についても、総合的・分析的評価の各事例から、ポートフォリオ評価、流暢・正確さについての考え方など、役立つ事例や説明が多い。個人的には、指導における修正やコメントなどフィードバック研究の事例が参考になった。

続く理論編3の「スピーキングの評価」では、タスク形式ごとの注意点、総合的评价と分析的評価に関する記述やルーブリックの作成例などが具体的に示されている。分岐型で示した EBB 尺度は、効率的にスピーキング評価を行うことが出来る点で有効だと感じ

た。このほか、スピーキングテストは実施時間の検討が必要なこと、準備や事後活動、評価の妥当性の確認方法などについて書かれており、テスト設計のための教師への配慮がなされている。

理論編4「リーディングの評価」では、コンポーネントモデルに基づいたテスト計画例を紹介している。テスト各項目は語彙、推論、要約など何を問うのかを決め、質問タイプや項目数を決定する。また、心的表象に基づいたテスト例や、テストに用いるための教科書本文と「パラレル」な文章を作成する際の留意点などについても書かれている。

理論編5「リスニングの評価」では、様々なリスニング力を能力ごとに定義した一覧表を用いて確認し、それらを素材のテキスト探しやタスクの設定に役立てる方法が紹介されている。また、定期試験と実力試験における目的の違いについて触れ、問題をいかに区別して作成すべきかが述べられている。

理論編6「技能統合的活動の評価」では、技能統合的活動における技能の組み合わせ例や、その評価対象としての最終技能を具体的なルーブリックを用いて評価する例などが説明されている。タスク全体を評価するのか最終技能を評価するのかについては迷うことが多いが、整理する上で非常に参考になる。

後半の実践編では、小・中・高、そして大学における各技能における授業実践と評価の事例を紹介している。事例を紹介しているいずれの指導者も、指導の中で生徒に身につけさせたい知識や技能を明確にし、そのための指導やテストを設定している様子や、計画どおりにいかず試行錯誤を行っている様子が記録されている。理論編1において説明されている PDCA サイクルを用い、適宜修正を加えながらよりよい指導と評価のあり方を探っている様子が伺える。

これから技能統合型の指導を計画し、CAN-DO リストを作成して評価を行おうと考えている多くの教員にとって、これらの理論と実践例は非常に参考になる。巻末の評価に関する用語解説も、学校現場の教員が言語評価の理論を理解する上で非常にありがたい。指導と評価の一体化を求められている中、教育現場に備えておきたい1冊である。

(やの けん・茨城県立水戸第一高等学校教諭)

英語指導における 効果的な誤り訂正 第二言語習得研究の見地から

白畑知彦 著

A 5 判 228pp.
本体1,900円＋税

大山 廉



より効果的な「誤り訂正」と「明示的指導」を 実践するための道標

授業、テスト、宿題など、教科指導に関するありとあらゆる場面において、英語教師にはその場にに応じた専門的な意思決定が求められる。そして、学習の途上で避けがたく生じる「誤り」というものにどう対処するか、つまり、どの言語項目に関する誤りに対してどのような方法で「誤り訂正」をするか、どの例文を使ってどのような言葉で「明示的指導」をするかといった問いは教師の頭を悩ませ続けてきた。

本書は、それらの指導方法が全ての言語項目の学習に対して等しく効果を持つわけではないことを示している。しかし同時に、対象とする言語項目や実施方法、生徒の習熟度を考慮して行えば効果的な方法になり得ると主張している。つまり、誤り訂正と明示的指導をより選択的に行うべきだということである。どの誤りに対してでも、いくつの誤りに対してでも、訂正し、説明すれば、生徒は理解してくれるものと思いがちであるが、そうではないということを本書は証拠をもとに明らかにした。そして、どうすれば生徒の英語学習にとって今よりもっと効果的で、教師にとって効率的な文法指導を行うことができるのかということを実証的に提示した点で、本書は画期的である。

本書は全10章、2部構成で、第1部では、母語獲得と第二言語習得における誤り訂正の役割が説明されている。ポイントは、中高生や大学生を含む大人の第二言語習得の場合、子どもと同様に発達順序や習得順序に沿って習得は進んでゆくが、母語の知識や様々な認知能力、分析能力を備えているため、それらを最大限に活かしながら教える方が効果的だということであ

る。誤り訂正と明示的指導の意義もそこにある。

第2部では、12の実証実験をもとにした教育実践への応用可能性が論じられている。主に大学生を対象とした実験の中で様々な言語項目（自動詞・他動詞の区別、名詞の単数形・複数形、比較表現、前置詞、接続詞、語彙など）に対して誤り訂正や明示的指導を実施し、その効果を検証している。最後の第10章「仮説に基づく指導への応用」では、あまり明示的指導に時間をかける必要のない言語項目、明示的指導が効果的な項目、効果的でない項目、母語と対比しながら教えるべき項目、有意味な文脈の中で繰り返し練習すべき項目、まずは文法項目の背景にある概念を指導すべき項目などが、体系的に分類されている。この知見は、目の前の生徒の誤りを訂正すべきかどうか、どのように説明すべきかに迷っている教師にとって、頼もしい道標となるだろう。

各実験の章末には、指導におけるポイントが示されており、これも具体的な指導場面で迷った際に進むべき道を示してくれる。例えば、困難度の高い文法形態素（e.g., 三単現-s）の習得には時間がかかるため、英文の内容を評価したい場合にはそれらの誤りに関しては減点しないなどの工夫をするべき、一度に複数種類の誤りを訂正すると注意散漫になってしまうため1つの項目に焦点を定めてフィードバックをすべき、などがある。また、明示的指導の具体例や指導に用いた教材・テスト例、日本語の構造と対比させながらの対象言語項目の記述が充実している点も参考になる。

最後に、印象的だったのは筆者の“interesting & fun”（p.176, 197）という言葉である。やはり英語学習は、知的に興味深く、楽しい方がよい。文法の説明に重きを置き過ぎていたために、話す能力を育てきれなかった従来の英語教育の問題点を指摘した上で、知的で楽しい意味のある文脈の中で、明示的指導から得た知識を使って繰り返し練習することによって、自動化した能力が育つという第二言語習得プロセスを筆者は提案している。今後、この提案が全国の教室での実践と研究の両面から支持され、深化されてゆくことが大いに期待される。

（おおやま れん・東北学院榴ヶ岡高等学校、山形県立新庄北高等学校非常勤講師）

英文法のエッセンス

江藤裕之 著

四六判 240pp.
本体1400円＋税

勝 啓一



見通しのよい文法書

本書は、一度英語を学んだ人に向けて書かれたものだという。頭の中にバラバラにインプットされている文法事項が整理されるよう、「可能な限り論理的で体系的な記述」（「はじめに」）がされている。大部な英文法書とは異なり、英語を理解するための必要最小限のエッセンスによって、英文法全体が見渡せるような形で記述されているのだが、文章はやさしく、高校生でも十分読み進めることができる。

200頁あまりで、高校までで学ぶ文法事項が取り上げられている。文理解の基本となる動詞から準動詞まで、全体の6割弱にあたる約120頁を使っている。特にこの部分の説明が、著者が考えるエッセンスが上手く組み合わせられていると感じた。

著者はまず「I 動詞の形が示す時間」において、時制と法に特に注意すべきとし、「現在・過去・未来」といった時間を区別し、また、事実を表す「直説法」の文なのか仮想や希望的観測を表す「仮定法」の文なのかを見極めることが最重要ポイント」と述べている。現在形は「現在を含む時間帯の事実」を示すという視点は大切である。時や条件の副詞節の中では現在形を使う理由が、「事実」として話者の頭の中で想定されていると考えれば、理解しやすい。完了形や進行形も、「事実」を述べるということを前提に、それが時間的視点からどこに位置づけられるのか、またどのように起こっているのかという視点から説明されている。

「II 心の想いを描く表現」において助動詞と仮定法について述べている。助動詞のエッセンスとして、「事実」ではなく、「話者の考え」を表す。「事実」で

ないという点から、助動詞は「未来的なニュアンス」をもつ」と述べている。これは、can, may, mustといった助動詞の持つ共通の文法的な意味である。また助動詞の過去形については、時間的視点より「気持ちの上で（心理的に）離れている」という心の状態を読み取る重要性を述べている。したがって、助動詞の過去形は「理屈ではできるが、実際ではやらないだろう」という含みを持ち、これが仮定法へとつながっていく布石となっている。

仮定法は、直説法との対立から説明し、ifの部分より注意すべき点は、助動詞の過去形は仮定法のサインの可能性があると指摘している。「仮定法とはif ーのこと」という思い込みはよくあることである。

「III 文中で様々な働きをする動詞の変化形」において、準動詞を扱っている。動名詞が「過去のこと」というより「事実」や「想定されたこと」を表すと述べている。こう説明すると、enjoy や stop が動名詞を取る理由が分かりやすくなる。

「IV 名詞と修飾の表現」では、名詞から比較までを扱っている。名詞については、数えられる名詞は「数」を、数えられない名詞は「量」「価値」「内容」などを問題にするとし、お金の場合は、重要なのは紙幣や効果の「数」ではなく、お金の「量」と分かりやすい説明である。不定冠詞と定冠詞が持つ文法的意味も簡潔にまとめられていて、イメージしやすい説明となっている。

「V 文中の「語のまとまり」を示す語」として前置詞から関係詞を扱っている。各前置詞の根本イメージがうまく説明されている。

またエッセンスばかりでなく、よく取り上げられる疑問に対して、ワンポイントコラムを設けているのも親切である。

文法の説明をするとき、これも教えなくては、あれも知っておいて欲しい、とどんどん説明が増えていくことはないだろうか。様々な本が出版されているが、本書は読者がいろいろ感じてきた文法の「なぜ」に答えながら、選び抜かれたエッセンスによって見通しのよい英語の全体像を見せてくれる。

（かつ けいいち・滋賀県立大津商業高等学校教諭）